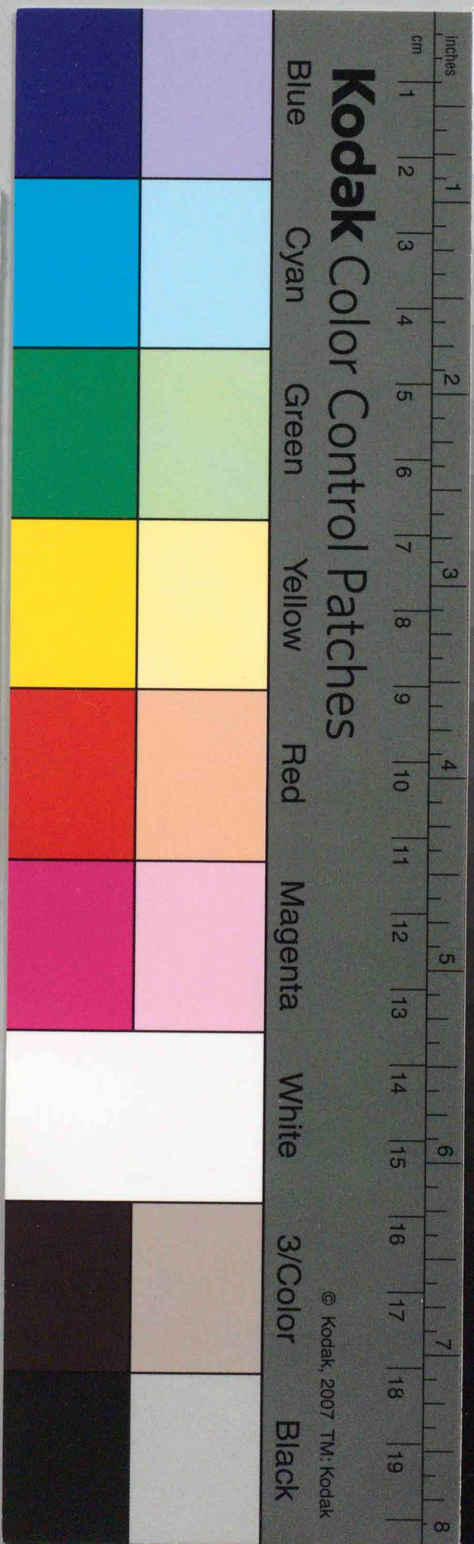


375.9
M.14
資料室

初等科國語

文部省

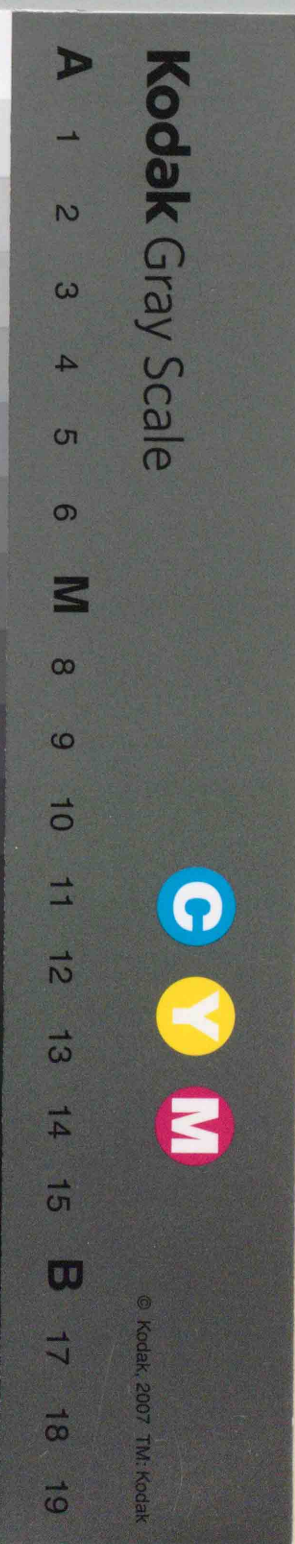
二



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

43123

教科書文庫

4
810
33-1942
20000 35905

200030
2767



資 料 簿

395.9
M014

初等科國語



文
部
省

二

もくろく

一	神の劔	四
二	稻刈	八
三	祭に招く	十四
四	村祭	十八
五	田道間守	二十
六	みかん	二十五
七	潜水艦	二十九
八	南洋	三十五
九	映畫	四十八
十	聖徳太子	五十
十一	養老	五十四

十二	ぼくの望遠鏡	六十一
十三	火事	六十八
十四	軍旗	七十六
十五	あもん袋	七十九
十六	雪合戦	八十八
十七	菅原道真	九十八
十八	梅	百二
十九	小さな温床	百六
二十	雪舟	百十
二十一	三勇士	百十六
二十二	春の雨	百二十四
二十三	大れふ	百二十六
二十四	東京	百三十



一 神の劔

神武天皇は、日向ひうがをおたちになつて、大和やまとの方へお進みになりました。

はるばると海を渡つて、紀伊きいの熊野くまのといふ村にお着きになりますと、ふいに、大きな熊くまが山から出て来て、すぐ、またかくれてしまひました。

天皇は、ふしぎに、ねむくおなりになりました。お供をしてゐた大勢みいさびとの御軍人みいさびとたちも、ねむくになりました。

いつのまにか、天皇は、おやすみになつていらつしやいます。御軍人みいさびとたちもみんな、ぐうぐうねてしまひました。この村に、高倉下たかくらじといふ人があました。夜、ふしぎなゆめを見ました。

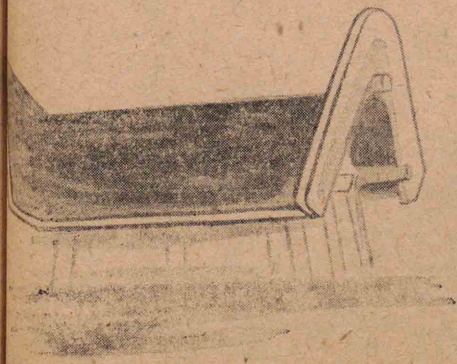
天照大神あまてらすおほみかみが、たけみかづちの神といふ強い神様に、かう仰せになつてゐます。

「日本の國は、今、たいそうさわがしいやうである。わがみこたちも、なんぎをしてゐられるであらう。」すると、たけみかづちの神は、



「この劔を、天皇にさしあげることに
いたしませう。熊野の村に、高倉下
といふ者がをりますから、その者の
倉を目あてに、この劔を落します。――
高倉下よ。朝に
なつたら、きつとこ

の劔を、天皇にさしあげるやうに。」
この御聲とともに、劔が天から落
ちて來ました。



高倉下は、はつと目がさめました。朝早く起きて、倉
へ行って見ますと、屋根をつき抜けて、ゆめに見た神様
の劔が、ちゃんとありました。

高倉下は、急いで、天皇のおやすみになっていらつし
やるところへ、かけつけました。

高倉下が、劔を天皇にさしあげると、

「おお、長くねたものだ。」

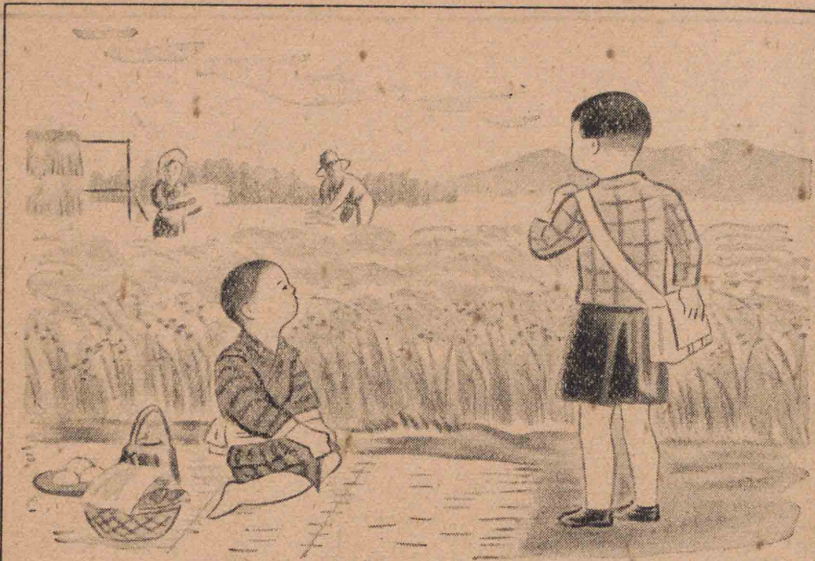
と仰せになって、天皇はお目ざめになりました。さう
して、劔をお受け取りになりました。

すると、あの熊になつて出て来たわる者たちは、この
劔で、みんな殺されてしまひました。

御軍人たちは、目をさましました。勇ましくふるひ
立って、大和へ進軍しました。

二 稲刈

學校がすむと、すぐ、たんぼへ行きました。今日は、
うちの稲刈です。よいお天氣で、あちらでもこちらで
も、稲を刈つてゐます。



田のあぜに、むしろを敷いてもらつて遊んでゐた弟
が、遠くから私を見つけて、

「ねえさん。」

と喜んで呼びました。

「ただいま。」

といつて、私はかばんをおろし
ました。

稲を刈つてゐられたおとうさ
んと、おかあさんは、腰をのばし

ながら、

「やあ、もう學校がすんだのか。早かったな。」

「そこのかごの中に、おいもがあるから、二人でおあがり。」

といはれました。

ふかしたさつまいもをかごから出して、弟といっしょにたべました。

稲がだんだん刈られて来るせみか、いなごが、たくさんこちらへ飛んで來ます。さうして、稲の葉や莖に止

ります。取らうとしても、なかなかつかまりません。

大きなのが一匹、すぐそばの稲の葉に止りました。

そつと近づくと、くるりと葉のうらへまはって、足の先だけ見せてゐます。右の手で、すばやく葉といっしょにつかまへました。左の手で、頭のあたりをつかむと、あと足をふんばって、逃げさうにしました。あわてて、ぎゅつとつかんだら、あと足が取れてしまひました。下に置くと、飛べないので、地面をはって行きます。

弟は、いなごを飼ふのだといつて、土でかこひをこし

らへました。いなごは、せまいかこびの中から、外へはひ出さうとします。

「この牛は、しやうがないぞ。」

と、大きな聲で弟がひとりごとをいひます。弟は、牛を飼つてゐるつもりなのです。私は、をかしくなつてふきだしました。

赤とんぼが、すいすいと、空を飛んでゐます。

ざくざくと、稲を刈る音が聞えます。私も、何か手つだはうと思つて、おとうさんや、おかあさんの方へ行き

ました。刈つたあとには、くくつた稲の束が、田の上にな並べてあります。

おかあさんは、刈るのをやめて、稲の束をまとめて、稲かけの方へ運んでゐられます。私も、少しづつ持つて運びました。

一人ぼっちになつて遊んでゐた弟が、たいくつして、

「ああん。」

といひました。おかあさんが、

「おまへ、行つて遊んでおやり。」

といはれたので、私は、また弟の方へ行きました。
それから、夕方まで、弟といっしょに遊びました。

三 祭に招く

うらの山で、もずが鳴いてゐます。氏神様のお祭の
ころになりました。去年、あなたといっしょにお参りし
て、楽しかったことが思ひ出されます。

今年は、二十五日のお祭の日が、ちやうど日曜日にな
ります。二十四日の午後から、ねえさんをさそって、ぜ
ひ来てください。

毎年ある花火は、今度はやめださうですが、二十四日
の晩は、いろいろな店が出てにぎはひます。お祭の日
は、おかぐらや、すまふがあります。それに今年は、五
年めに一度ある牛行列が通るさうです。牛にきれいな
着物を着せ、牛飼が、赤白のたづなを引いて通るのは、
まるで繪のやうださうです。

どうぞ、ぜひおいでください。母も、みよ子も、お待
ちしてゐます。

十月十八日

とし子

ゆり子様

お手紙、ありがたうございます。去年のお祭のことを思ひ出して、急になつかしくなりました。お手紙のことを姉に申しましたら、たいへん喜んで、ぜひ参りたいといつてゐます。

久しぶりでおあひして、みなさんといっしょに、氏神様へお参りをしたり、おかげぐらや、すまふを見たりしたいと思ひます。今年は、めづらしい牛行列が見られるさうですね。今から楽しみにしてゐます。

二十四日の午後三時ごろ、そちらへ参ります。どうぞ、おかあさんによるしくおっしゃってください。

みよ子さんのおみやげに、わたしの作ったお人形さんを、持って行ってあげたいと思ひます。さやうなら。

十月二十日

ゆり子

とし子様

四 村祭

村のちんじゆの神様の
 今日、めでたいお祭日。
 どんどんひやらら、
 どんひやらら、
 朝から聞える笛たいこ。

としも豊年満作で、

村はそう出の大祭。

どんどんひやらら、

どんひやらら、

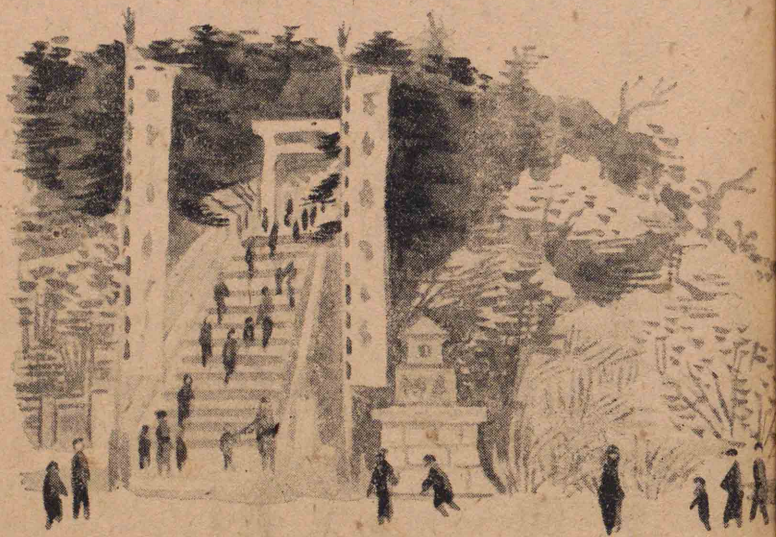
夜までにぎはふ宮の森。

治る御代に、神様の

恵みたたへる村祭。

どんどんひやらら、

どんひやらら、



聞いても心が勇みたつ。

五 田道間守

垂仁天皇の仰せを受けた田道間守は、船に乗って、遠い、遠い外国へ行きました。

遠い外国に、たちばなといって、みかんに似た、たいそうかをりの高いくだものがあることを、天皇は、お聞きになつていらつしやいました。田道間守は、それをさがしに行くことになつたのです。

遠い外国といふだけで、それが、どこの國であるかは、わかりません。田道間守は、あの國この島と、たづねてまはりました。いつのまにか、十年といふ長い月日が、たつてしまひました。

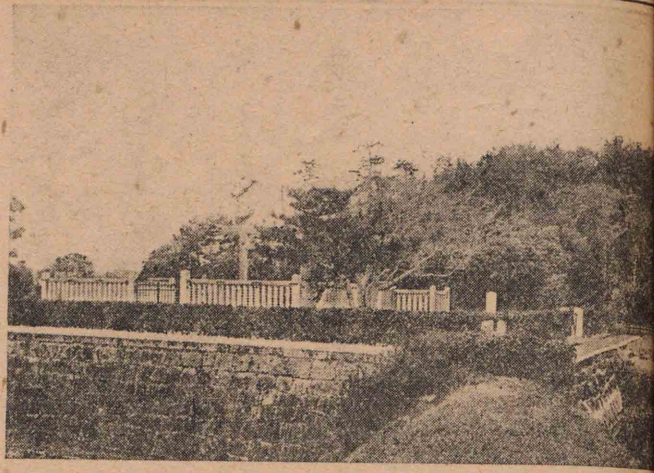
やつと、あるところで、美しいたちばなが生つてゐるのを見つけました。



田道間守は、大喜びでそれを船に積みました。枝についたままで、たくさん船に積みました。さうして、大急ぎで、日本をさして歸って來ました。

「さだめて、お待ちになつていらつしやるであらう。」
さう思ふと、田道間守には、風を帆にいつぱいはらんで走る船が、おそくておそくて、しかたがありませんでした。

日本へ歸つて見ますと、思ひがけなく、その前の年に、天皇は、おかくれになつていらつしやいました。



田道間守は、持つて歸つたたちばなの半分を、皇后にけん上しました。あとの半分を持つて、天皇のみささぎにお参りしました。枝についたままの、美しい、かをりの高いたちばなを、みささぎの前に供へて、田道間守は、ひざまづきました。

「遠い、遠い國のたちばなを、仰せによつて、持つてまゐりました。」

かう申しあげると、今まで、おさへにおさへてみた悲しさが、一度にこみあげて、胸は、はりさけるばかりになりました。田道間守は、聲をたてて泣きました。

田道間守は、昔、朝鮮てうせんから日本へ渡って来た人の子孫でした。しかし、だれにも負けない忠義の心を持ってゐました。

泣いて泣いて、泣きとほした田道間守は、みささぎの前にひれふしたまま、いつのまにか、つめたくなつてゐました。

六 みかん

寒い冬の風が吹くころは、みかんの木といふ木に、むしろやこもの着物を着せて、暖くしてやります。それでみかんの木は、しもや雪をじつところへて、静かに眠つてゐます。

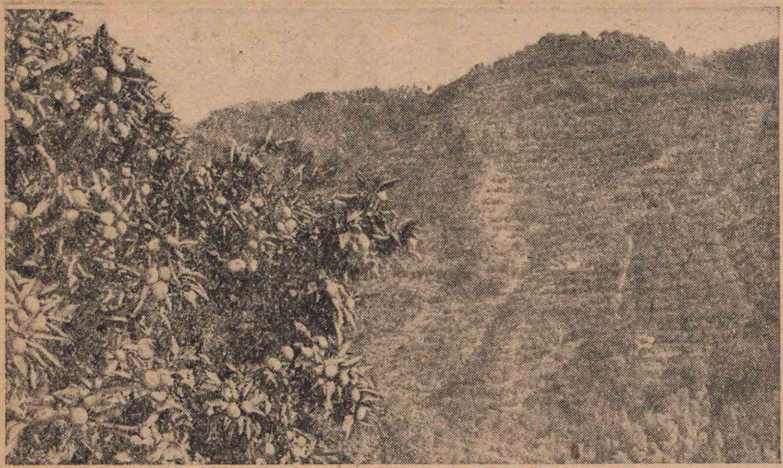
春になつて、暖い太陽が山一面にかがやきだすと、このみかんの木に若芽がすすくすくとのびあがり、やがて、まっ白な花が咲いて、何ともいへない、よいかをりがあ

たりに満ちあふれます。その花が散ったあとには、か
はいらしい青い實が生ります。

夏が来て、海の方から、そよそよと風が吹いて来ると、
この實は、日に日に大きくなります。すると、いろいろ
な害虫が、葉や枝にとりついて、みかんの木を苦しめま
す。そのままにしておけば、みかんの木は、弱ってしま
ひますから、いろいろの薬で、害虫を何べんも除きます。
かうして育てたみかんの實は、秋のお祭のたいこが、村
村に鳴りひびくころになると、ぼつぼつ、黄色みをおび

て来ます。もうかうなつたらしめたものです。

秋が終りに近づき、そろそろ冬が
始るころには、この黄色にだんだん
赤みが増して来て、おいしさうなみ
かんが、山といふ山、谷といふ谷を、
うづめつくしてしまひます。その
けしきの美しさと、みかんを作った
人たちの喜びとは、ことばでは、とて
もいひあらはすことができません。



かごを持って山へのぼる人、みかんをせおって山をおりて来る人、上手にはさみを使って、みかんを取りながら、みかん取り歌を歌ふ人たちで、急に、山はにぎやかになります。

山から取って来たみかんは、一家そろう出で、いろいろな種類に分けて、きちんと、箱につめて送り出します。その時は、目がまはるほどいそがしいのです。しかし、長い間かはいがって育てたみかんが、日本中はもちろん、遠い支那へも、満洲へも、旅だつのだと思ふと、心が

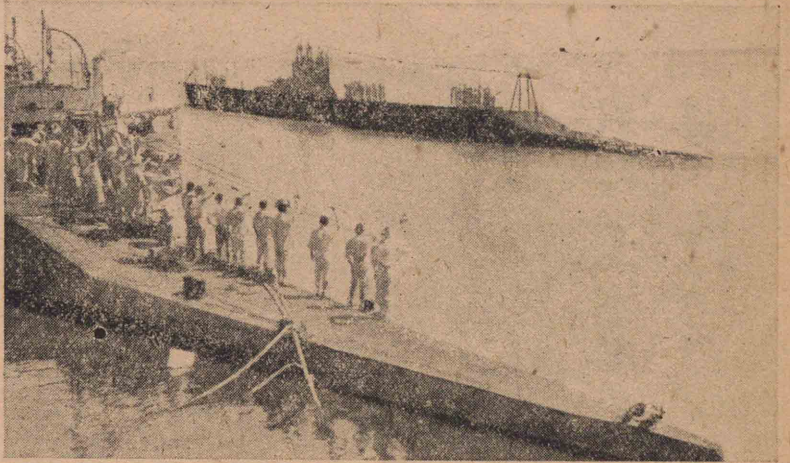
勇んで、みんなにこにこしながら、せっせと働きます。

かうして、あたたかい心で育てられ、しんせつな手で、荷作りされたみかんは、汽車や汽船にのせられて、ふるさとを出發して行きます。

七 潜水艦

春雄、をぢさんは、今度、潜水艦の艦長を命ぜられた。今日は、潜水艦のことを話してあげよう。

潜水艦は、からだ小さい。だが、軍艦旗を朝風にな



びかせながら、軍港を出て行く時、港内にゐる軍艦と、たがひにあいさつのラツパを吹きかはして、海の上を進んで行くのは、何ともいへないゆくわいなものだ。

ところで、この潜水艦が、水の中へもぐるのだと聞くと、沈んだきりで、浮かないことがありはしないかと、思ふものもあるやうだが、今の潜水艦は、うまくで

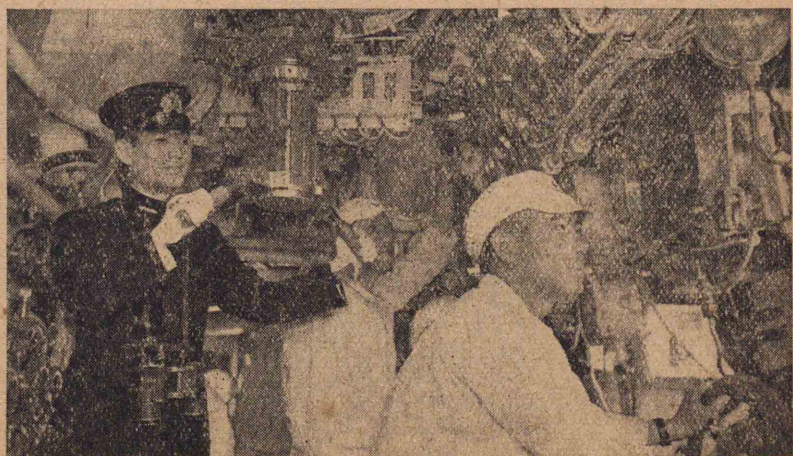
きてゐるから、そんなしんはいは、まったくない。もぐりたいと思へば、いつでも、潜水艦の中のたくさんのタングへ、水を入れて沈む。その水を押し出せば、自由に海の上へ浮くことができるのだ。

水の中へもぐったら、海の上が見えないだらうと思ふであらうが、細長い望遠鏡ばりえんきやうのやうなものがあって、海の上を、すっかり見渡すことができる。また、水の中で音を聞きわけける機械もあって、敵艦の進んで来る音を聞きわけながら、敵に近寄ることもできる。だから、潜

水艦の乗組員の中には、どんな音でも聞きわけけるやうな人が、みなくてはならない。春雄も、今のうちから、いろいろな音が、聞きわけられるやうにしておくことがだいじだよ。

これらのほかに、みかたの潜水艦どうして、信號しあふ機械がある。

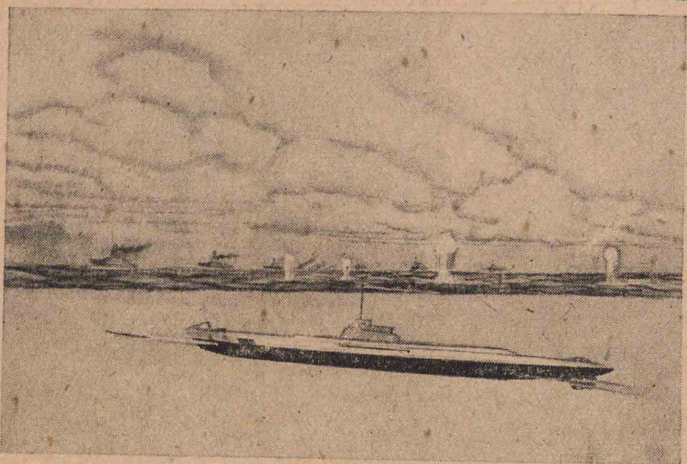
海の深さが、どのくらゐあるか、敵艦までどのくらゐはなれてゐるか、自分の乗つてゐる



潜水艦が、今、何メートルの深さに沈んでゐるか、どれ

ほどの早さで走つてゐるか、それらを一々はかる機械がある。だから、潜水艦は、水の中にもぐつてゐても、海の上にあるのと同じやうに、どこへでも行くことができる。

潜水艦には、大砲もある、機関銃もある。中には、飛行機を持ってゐるものもあるが、やはり、いちばんだいじな武器は魚雷



だ。魚雷をうち出すと、生きた魚のやうに、水の中をくぐりながら、敵艦をめぐらして行って、つきあたる。山のやうな戦艦や、巡洋艦じゆんやうや、航空母艦かうくうぼも、この魚雷にはちぢみあがつてしまふのだ。思っただけでも、ゆくわいではないか。

潜水艦は、見はりをしてゐる大きな敵艦にこつそり近寄ったり、遠く海を乗りこえて、敵の港の中へしのびこんだりして、ふいうちをする。そのためには、乗組員に、勇氣とおちつきがたいせつだ。かうした勇氣やおちつきは、子どもの時から、きたへるやうにしななければならない。

どうだ春雄、大きくなつたら、をぢさんのやうに、潜水艦に乗って、お國のために、働きたくはないかね。

八 南洋

今日は日曜日で、子ども常會の日です。勇さんのうちで、げんどう會がありました。

正男さんも、太郎さんも、次郎さんも、花子さんも春

枝さんも、ゆり子さんも、みんな集りました。

勇さんのおとうさんは、にこにこして、

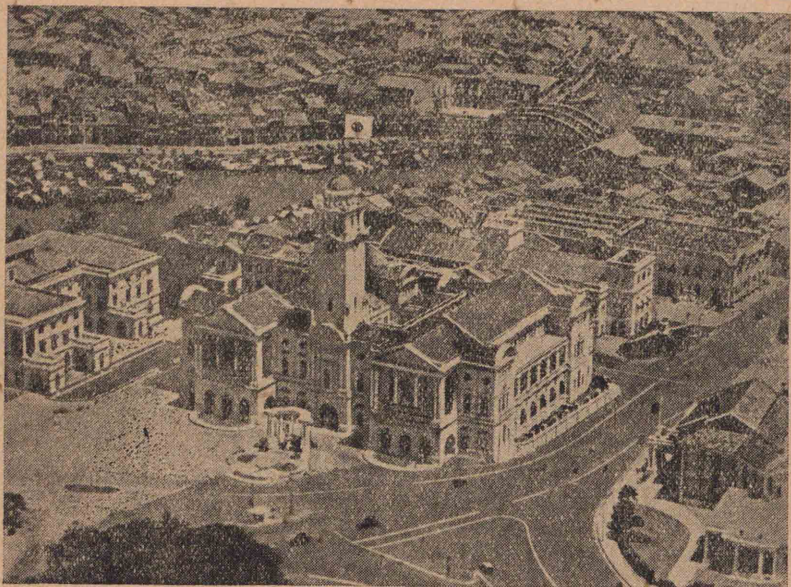
「今日は、おもしろい南洋の寫眞を、うつしてあげませう。」

といはれました。

黒い紙をはって、部屋を暗くしました。かべには、白い布がはってあって、それに、南洋のけしきが、次から次へとうつつて行きました。

いちばん初めに、美しい日の丸の旗のひらめいてゐる昭南島のけしきがうつりました。

「どんなことがあつても落ちないと、イギリスがいばつて、またシンガポールも、わが陸海軍の勇ましい兵隊さんたちによつて、攻め落されてしまひました。名も、昭南島とあらためられて、このやうに日の丸の旗が、南の空にひる



がへつてゐるのです。」



と、勇さんのおとうさんが説明されたので、みんなはうれしくてたまりませんでした。

青い海に、静かにかげをうつしてゐるやしの木の寫真がうつりました。

「南洋の海は、明かるくてまっさをですから、着物でもひた



してそめたいと思ふほどの美しさです。その海面にかげをうつすのがやしの木で、こんなけしきは、南洋のどこへ行っても見ることができます。」

寫真がかはりました。あたり一面に、ぱつと白い花をまき散らしたやうです。

「あつ、らくかさん部隊だ。」
「まあ、きれいだこと。」

と、勇さんと、花子さんがいっしょにいひました。

「勇ましい日本のらくかさん部隊が、スマトラの空から、地上へおりて行くところですよ。」

かういって、勇さんのおとうさんは、スマトラを始め、南洋からたくさんのせきゆが出ることに、せきゆは飛行機を飛ばしたり、自動車や船を走らせたりするのに、なくてはならないものであることを、お話しになりました。

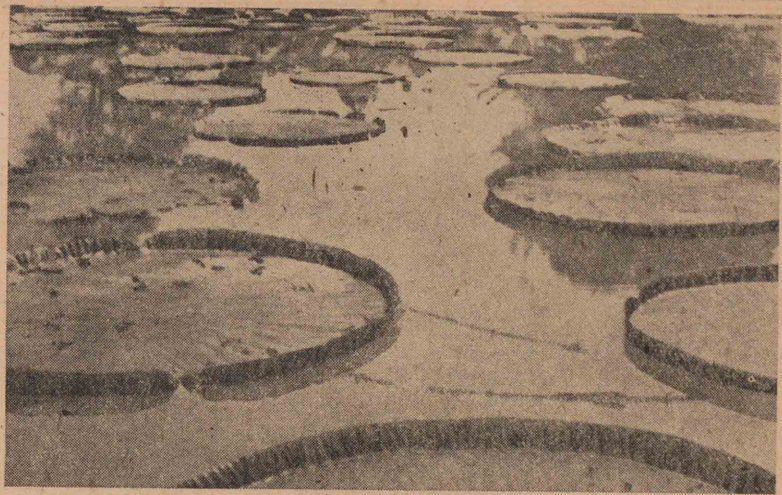
「をぢさん、ゴムも南洋から出るのでせう。」

と、正男さんがたづねました。

「さうです。世界中のゴムの大部分は、南洋から出る



のです。では、ゴムの木をうつしませう。——木の幹にすぢがつけてあるでせう。そのみぞをつたはって、ぽたりぽたりと落ちる木の汁を、茶わんのやうな器で受けます。それを集めて、か



ためると、ゴムがでけるのです。あなたがたが使ふ消しゴムや、ゴムまりも、はるばる南洋から海を渡って来たゴムで作ったものです。」

また、ちがった寫眞が出ました。「何だらう。まるで、大きなおぼんが浮いてゐるやうだなあ。」

と、太郎さんが、大きな聲でいひました。

「めづらしいでせう。これは、ジャワの植物園にある鬼ばすといふ大きなはすです。葉のさしわたしが一メートルもあつて、南洋の小さな子どもが、よく葉の上に乗って遊びます。」

「をちさん、鬼ごっこはできませんか。」

と、次郎さんがいったので、みんなが笑ひました。

「まさか、鬼ごっこはできないでせう。」

と、勇さんのおとうさんも笑ひながら、

「さあ、次には、あなたがたのすきな動物をうつしませ

う。何がうつるか、あててごらんなさい。」
といはれました。

「わにかな。」

と、まっ先にいったのは勇さんでした。

「くじやくかしら。」

と、春枝さんがいひました。

「あつ、象ざうが出た。」

次郎さんは、うれしさうな聲でさげびました。

「これはおまけですが、タイ國の寫眞です。よくなれ



た象が 大きな材木を、運んであ
るところです。」

正男さんがいひました。

「南洋って、かはってゐて、おもしろいところですね。ぼく、行つてみたくなりました。」

みんなもさう思ひました。

すると、その時、寫眞がかはって、田植をしてゐるところがうつりま



した。

「日本の寫真ね。」

と、ゆり子さんがいひました。

勇さんのおとうさんは、

「なるほど、日本によく似てゐます

ね。しかし、これも南洋の田植で

す。日本と同じやうに、南洋でも

お米を作つてゐるのは、おもしろ

いことではありませんか。これ

から、しっかりと手をつないで行く日本も南洋も、みんなお米のできる國なのです。

それでは、今日のげんとう會は、これでおしまひにしませう。」

といはれました。

黒い紙を取りのけると、今まで暗かった部屋が、ぱつと明かるくなりました。空は、今、寫真で見た南洋の海のやうに、青々とすみきつてゐました。

九 映畫

映畫の幕は、

たったあれだけなのに、

山がうつる、川がうつる。

映畫の幕は、

たったあれだけなのに、

五階、六階、家が出て来る。

映畫の幕は、

たったあれだけなのに、

何十臺の戦車が通る。

映畫の幕は、

たったあれだけなのに、

何萬トンの、ほら、軍艦だ。

十 聖徳太子しやうとく

聖徳太子は、お生まれつき、たいそう賢いお方でありました。

ある日、太子は、御兄弟のかたがたと、お庭で遊んでいらつしゃいました。みんな、お小さいかたがたのことですから、初めは、仲よくしていらつしゃいましたが、そのうちに、何か、ちよつとしたことで、つい、けんくわが始まりました。

太子の御父君を、橘たちばなの豊日尊とよひのみかみと申しあげました。のちに、御位におつきになつて、用明天皇と申しあげるお方であります。尊は、お子様たちが、何か大きな聲をして、さわいでいらつしゃるのをお聞きになつて、お庭へ出てごらんになりました。

すると、お子様たちは、

「きつと、おとう様にしかられるにちがひない。」とお思ひになつて、みんな逃げておしまひになりました。

しかし、聖徳太子だけは、お逃げになりませんでした。
 お逃げにならないばかりか、
 つつしんで御父君の前へお
 進みになりました。

尊は、
 「なぜ、あなたは逃げない
 のですか。」

とおたづねになりました。

太子は、



「おとう様のお心にそむいて、けんくわをいたしまし
 た私たちでございます。橋をかけて、天へ逃げるこ
 ともできません。穴をほって、地にかくれることも
 できません。不孝のおとがめを、つつしんでお受け
 いたすばかりでございます。」
 とおっしゃいました。

橘豊日尊は、太子のこのおことばを、お聞きになって、
 たいそうお喜びになりました。

これは、聖徳太子が、四歳の御時のことであつたと申

します。

十一 養老やうらう

村の人が、二人で話をしてゐる。

村の人一「もみぢが、きれいになりましたね。」

村の人二「たきのあたりは、ずゑぶんみごとでせう。」

村の人一「ときに、あなたは、あの感心な子どものはさを、

お聞きですか。」

村の人二「ああ、あのいつも、たきぎをせおつて歩く子どもの

ことでせう。毎日山へ行って働いて、歸りには、年

取ったおとうさんのすきなものを、いろいろ買つ

て來るといふことですね。」

村の人一「さうです。その子です。その子について、このご

ろ、ふしぎな話があるのです。」

村の人二「どういふ話ですか。」

村の人一「なんでも、その子が、山で酒の流れてゐるところを、

見つけたといふのです。」

村の人二「なるほど、それはふしぎな話ですね。」

村の人一「きつと、子どもの孝心が、神様にとどいたのだから
と、みんながいつてゐます。」

村の人二「それにちがひありますまい。」



村の人一「おや、うはさをす
ればかげとやら、
向かふから、あの
子がやって来まし
たよ。」

そこへ、たきぎをせおつた子どもが、出て来る。

子ども「こんにちは。」

村の人一「こんにちは。」

村の人一「よくせいが出ますね。」

子ども「いや、まだいっかう役にたちません。」

村の人二「おとうさんは、元氣になられましたか。」

子ども「おかげさまで、どうやら、うちで仕事をしてをりま
す。」

村の人一「それは何よりです。聞けば、あなたは、山で酒を見
つけたといふことですが、ほんたうですか。」

子ども「はい、ほんたうでございます。この間、私が、山で
 たきぎを拾つてゐますと、つい、足がすべつてころ
 びました。起きようとすると、そのへんに、酒の香
 がいたします。ふしぎなことだと思つて、あたり
 を見ますと、石の間から、水が流れ出てをります。
 それが酒でございましたので、父のみやげに持っ
 て歸りました。」

村の人一「それは、めでたい話だ。あなたの孝行のせゐです
 よ。まあ、おとうさんをだいじにしておあげなさ
 い。」

子ども「ありがたうございます。では、ごめんください。」
 子どもは、おじぎをして歸る。

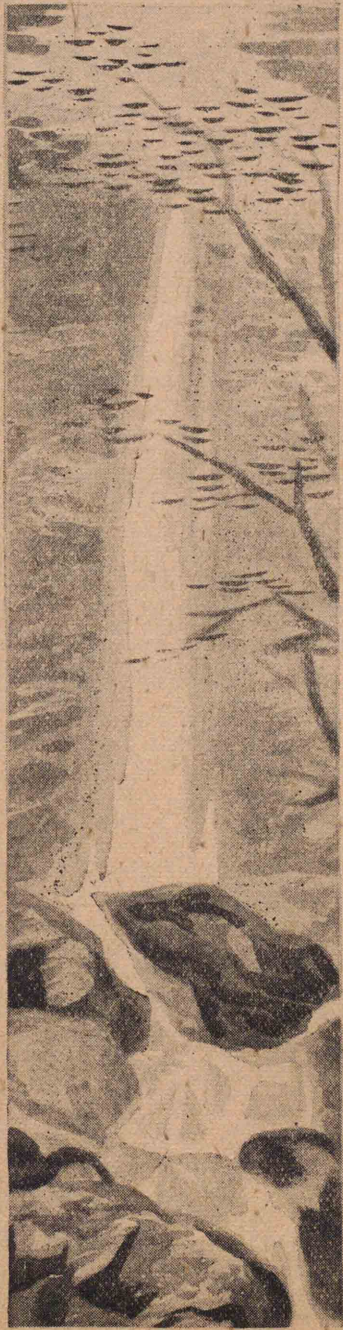
村の人一「感心な子どもですね。」

村の人二「ほんたうに。」

二人の村の人は、子どもの後姿をじつと見てゐる。

そののち、この親孝行な子どもの話が、都にも傳は
 りました。

おそれ多くも、時の天皇が、それをお聞きになつて、
わざわざ、そのところへお出ましになりました。
さうして、子どもの孝行をおほめになつて、年號を、
「養老」とお改めになりました。



十二 ぼくの望遠鏡

机の引出しを、かたづけてみると、いつか、おぢいさん
にいただいた、古いめがねの玉と、おとうさんに買っ
ていただいた、小さな虫めがねが出て来た。

「これは、いいものが見つかった。」と思ひながら、ぼく
は、この二つを、重ねたり、別々にしたりして、机の上を
見たり、外のけしきを、のぞいたりしてみた。
そのうちに、ふと、おもしろいことを発見した。

左の手にめがねの玉を持って、目から遠くはなした。すると、向かふのけしきが、小さく、さかさまに見えた。そのさかさまに見えるけしきを、大きくして見ようと思つて、右の手に虫めがねを持って、のぞいて見た。ぼくはおどろいた。どこかの屋根が、めがねの玉いっぱいひろがつて、つい、そこにあるやうに見えるではないか。それは、ここから百メートルもはなれてある、向かふの家の屋根であつた。

「おもしろい。これで、いつか、おとうさんのお話に聞いた望遠鏡が、できるかもしれない。」かう思ひつくと、ぼくは、もう、じつとしておられなくなった。

ぼくは、畫用紙を取り出した。さうして、その一枚をぐるぐると巻いた。ちやうど、めがねの玉が、はまるくらゐの大きさに巻いて、その一方のはしに、めがねの玉をはめた。きちんとはまった時、巻いた紙を、糸できりきりと巻いて、動かないやうにした。これで、一本の筒ができあがつた。

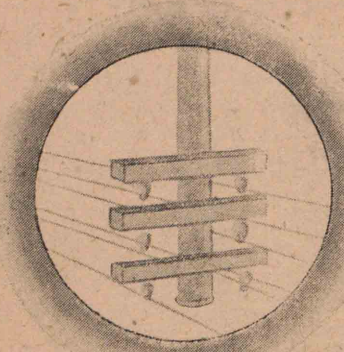
次に、もう一枚の畫用紙を、ぐるぐると巻いた。さう

して、さっきの筒の中へ、ちやうど、するするとはいるくらゐの大きさに作って、そのはしに、虫めがねをとりつけた。

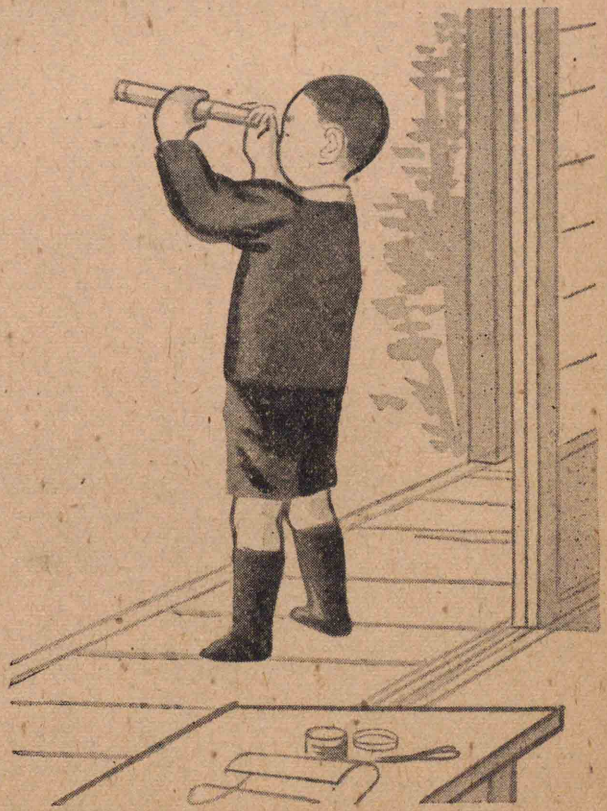
かうしてできた二本の筒は、うまくはまり合って、長く延したり、ちぢめたりすることができる。

さあ、できたぞと思ふと、うれしくてたまらない。うまく見えるか、どうか。

外をのぞいて見た。長い物が、ぼんやり見える。二つの筒を、延したり、ちぢめたり、かげんしてゐるうちに、はつきりした。電柱だ。針金が、六本あることまでわかる。



もつと下を見る。屋根だ。しゃうじだ。おや、だれかが、しゃうじの間から顔を出してゐる。ぼくは、もう、むちゅうだった。急いで、おかあさんのところ



るへ行つた。

「おかあさん、来てごらんなさい。早く早く。」

おかあさんは、目をまるくして、

「何です。正男さん、大きな聲をして。」

「何でもいいから、来てください。」

ぼくは、おかあさんを引っぱるやうにして、つれて来た。さうして、ぼくの望遠鏡をのぞいてもらった。

「まあ、よく見えるね。でも、すっかりさかさまぢやないの。」

「さかさまでも、よく見えるでせう。」

「なるほどね。向かふの家のせんたく物が見えます。」

あ、人がこつちを見てゐる。森の木がきれいですね。」

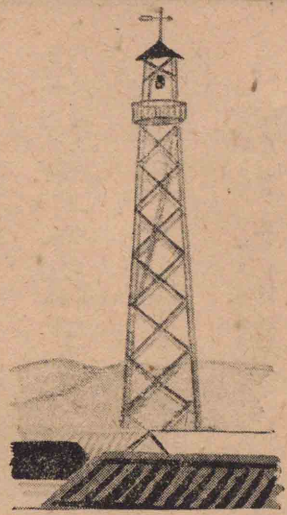
しばらく見てゐられたおかあさんは、おっしゃった。

「おまへはえらいね。だれに教へてもらったの。」

ぼくは、とくいだった。

「だれにも教へてもらはないのです。ぼくが、考へて作ったのです。」

十三 火事



日がくれてまもなく、けたたましく、半鐘はんしょうが鳴りだしました。

窓をあけて見ると、西の方の空が、まっかにそまっています。火事は、少しはなれた川向かふの町だと、すぐわかりました。おとうさんは、夜業をやめて、急いでしたくをして、家を出られました。おとうさんは、警防員なのです。

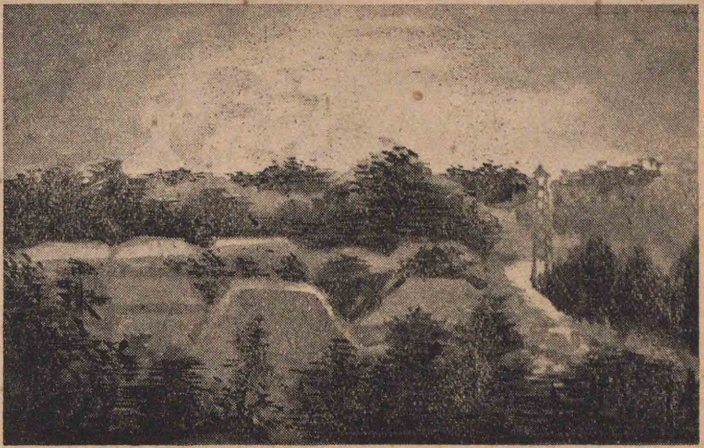
おとうさんを送り出してから、おかあさんは、

「火事は、をぢさんのうちの方角だから、わたしは見まひに行きます。おとうさんは、消防の役目でお働きになるのだから。」

と行って、出て行かれました。

をぢさんのうちの方角と聞いて、私は、恐しくなりました。おばあさんもしんぱいさうです。

家の前を、警防團の人たちが、ポンプを引いて、勢よくかけて行きました。遠く走るポンプ自動車のサイレ



ンの音も聞えます。

向かふの空に、ぱつと火の粉があ
がったり、また、少し暗くなったりし
ます。半鐘の音、サイレンの音、人の
聲などが入りまじって、遠くの方で
聞えます。

「だいぶ大きいらしいぞ。」

と、道を通る人が、話し合つてみました。

火事は、なかなか消えさうに見えません。

「さよ子、おまへは、あした、学校があるのだから、しん
ぱいしないで、もうおやすみ。」

と、おばあさんにいはれて、私は、ねどこの中へはいり
ましたが、火事が氣になって、なかなか眠れませんでした。
た。

朝、おかあさんに呼び起されて、目をさますと、をぢ
さんや、をばさんが、うちへ来てゐられます。私はびっ
くりしました。ゆうべの火事で、をぢさんのうちも、焼
けたさうです。火もどからは、だいぶはなれてゐまし

だが、風しもになってみたので、一度運び出した荷物まで焼けてしまったのださうです。

私は、

「をばさん、猫はどうしました。」

と聞きました。をばさんは、

「どうしたかわかりません。荷物をかたづけるとき、どこにもありませんでした、何べんも呼んでみたけれど、焼け死んだのかも知れません。」

「かはいさうに。」

と、私はいひました。

やがて、おとうさんが、歸つて來られました。

おとうさんは、をちさんやをばさんに、

「ほんたうにきのどくだったが、けがのないのが、まあ、何よりのしあはせだ。わたしは、消防にばかり働いてみて、手傳ひもできず、まことにすまなかつた。」
といはれました。すると、をちさんは、

「いや、手傳ひは、ねえさんに十分してもらひました。それよりも、あの風に、四つついで、火事を消しとめ

たのは、えらいてがらです。町のめぬきの場所が助ったのは、まったく警防團のかたがたのおかげです。

みんな、つかれきつてあます。平生は元氣なをばさんが、今日は、いちばんしよんぼりとして、さびしさうに見えます。

「をばさん、これから、ずっと私のうちにいच्छゃいね。」

どいひますと、をばさんは、



「ああ、たうぶん、やっかいになりますよ。」
どいつて涙をこぼされました。

あとで聞けば、この火事には、焼け死んだ人もあつたさうです。さうして、こんな大火事の起つたのも、ある家の子どもが、マッチをすつて、そのもえがらを捨てたのが、もとだといふことです。

「子どもの火あそびが、いちばんいけない。やめることだ、やめることだ。」

おとうさんは、ひとりごとのやうに、かういはれました。

十四 軍旗

軍旗、軍旗、

天皇陛下の

みてつから、

お授けくださる尊い軍旗、

わが陸軍のしるしの軍旗。

軍旗、軍旗、

天皇陛下の

おことばを、

心にきざんでみ國を守る、

わが陸軍のいのちの軍旗。

軍旗、軍旗、

天皇陛下の

御前に、

死ぬるかくごで敵地に進む、

わが陸軍のひかりの軍旗。

軍旗、軍旗、

天皇陛下の

みいくさに、

いつでも勝つててがらをたてる、

わが陸軍のほまれの軍旗。

十五 みもん袋

寒い夜

外では、寒い風が吹いてゐます。

夕飯のあとで、火ばちにあたってみかんをたべながら、みんなで、戦地の兵隊さんの話をしました。

「めつきり寒くなって、兵隊さんたちも、さぞ、お困りだらう。」

と、おちいさんがいはれました。

「兵隊さんに、このみかんをあげたいなあ。」

といって、弟が、たべかけてみたみかんを見せました。

「おかあさん、うち中で、みもん袋を作って送ってあげませうよ。」

と、私がいふと、

「それはいいね。では、これから、こしらへることにしませう。」

と、おかあさんがいはれました。

「さあ、どんな品物を送ってあげるかな。ひとつ、めい

めいで考へてみよう。」

と、おとうさんがいはれました。

私は、何にしようかと思つてみると、弟は、自分の机の前へ行つて、何かさがし始めました。さつきから、せつせと、くつ下をあんであたねえさんがいひました。

「おとうさん、このくつ下は、おとうさんのにと思つて、あんであたのですけれど、これを送つてはいけないでせうか。」

「いいとも、送つておあげ。」

おかあさんは、

「別にこれといって、送ってあげるやうなものもないが、うち中でついたかき餅と、あなたたちが手傳つて作った干柿と、それに、栗もあるから、それを入れることにしませう。」
といはれました。

「ぼくは、これを入れよう。」

さういひながら、弟が持つて来た圖畫を見ますと、子どもが、手をあげてけい禮をしてゐる繪でした。

そのそばに、

「ヘイタイサン、サムイデセウ。ゲンキデ、ハタライテ
クダサイ。シツケイ。タダシ。」
と、クレヨンで書いてありました。

「あら、いやだ、しっけいなんて。」

と、私がいひますと、

「いやいや、兵隊さんは、きつと喜ばれるだらう。なか



なかない思ひつきだ。」

と、おとうさんにほめられたので、弟はとくいになりました。

私は、私のだいすきな、かはい人形と、みもん文を入れました。

兵隊さんからの手紙

ある日のこと、知らない兵隊さんから、手紙が来ました。急いであけて見ますと、いつか送ったみもん袋のお禮の手紙でした。

私は、それを、みんなの前で読みました。

支那の廣い野原は、今、白い雪で一面におほはれています。川の水も、堅い氷の下で眠ってあります。外は、零下二十度といふ寒さです。

午後の演習をすまして、兵舎へ歸つて來ると、みもん袋が来てみました。私は、とびあがって喜びました。開いてみると、あなたのみもん文といっしょに、いろいろな品物が出て来ました。

「おい、かき餅が来たぞ。干柿もある。栗もある。みんな

な集れ。」

と、私は思はず大聲でいひました。友だちの兵隊は、「何だ、何だ。」といひながら、まはりに、大勢集つて來ました。

だんろの火で、かき餅を焼きました。

「久しぶりで、内地のにほひをかいた。」

「干柿はうまいなあ。郷土の味がする。」

などといひながら、みんなでおいしくいただきます。

ただしくんの圖畫は、ぼくた

ちの室のかべにはりました。

その前に立つて、「タダシクン、

シツケイ。」といたりします。

あたたかい毛糸のくつ下を見

て、みんなは、

「ぼくに、ちよつと、はかしてくれ。」

「ぼくにも。」

と、いつて、かはるがはる、はきました。



あなたのお人形は、私のポケットにしまつてあります。戦争する時も、お人形さんは、私といっしょです。

いろいろとありがたうございました。ときどき、おうちのことや、学校のことを知らせてください。私も、戦地のやうすを知らせてあげませう。みなさんに、よろしくお禮を申しあげてください。さやうなら。

十六 雪合戦

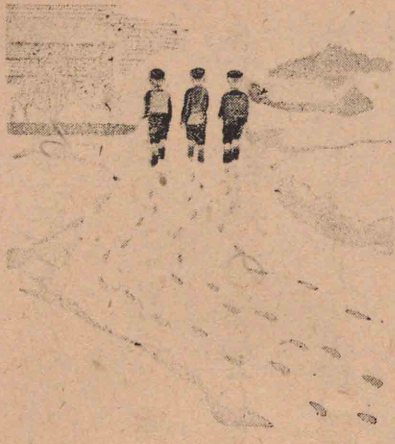
雪が降つた。あたりが明かるくなつて、氣がはればれとする。

学校へ行く時、雪の上を歩いて行つた。ふり返つて、足あとを見ると、くねくねと、曲つてついてゐた。向か

ふから、友田くと小野くんがやつて来た。

「おはやう。」

「おはやう。」



三人が、並んでまた雪の上を歩いたら、足あとも、並んでついた。学校の窓も、廊下も、雪で明かるい。

體操の時間になった。外に集るやうにと、先生がいはれた。きつと、雪合戦をするのだらうと行って、みんなは喜んだ。

「集れ。」

先生の大きな聲がする。みんなは、雪の上に乗って並んだ。

「今日は、雪合戦をする。前列は赤、後列は白。」
両方に分れて、それぞれ陣地についた。

「築城始め。」

の號令で、兩軍は、一生けんめい、雪のかたまりをこしらへては、それを積み重ねた。高さ一メートル半ばかりの山を作つて、その上に、旗を立てるのである。山は、たちまちできあがつた。先生は、両方の山の高さをはかされた。

みかたの城には、赤い旗がひるがへり、敵の城には、白い旗がなびいた。

友田くんも、小野くんも、今日は敵だ。にこにこしてこちらを見てゐる。

「たまを作れ。」

みんなは、雪のたまを、いくつもいくつもこしらへた。やがて先生が、

「笛を鳴らしたら、たまを投げ

る。次に進めの號令を掛けた

ら、攻撃を始める。」

といはれたので、みんなは、雪のたまをかかへた。

「ピリー」と、笛が鳴った。「わ

あ」といひながら、たまを投げ始

めたが、とどかない。少しづつ前

進する。ぼくは、友田くんをめが

けて投げた。うまく頭のところ

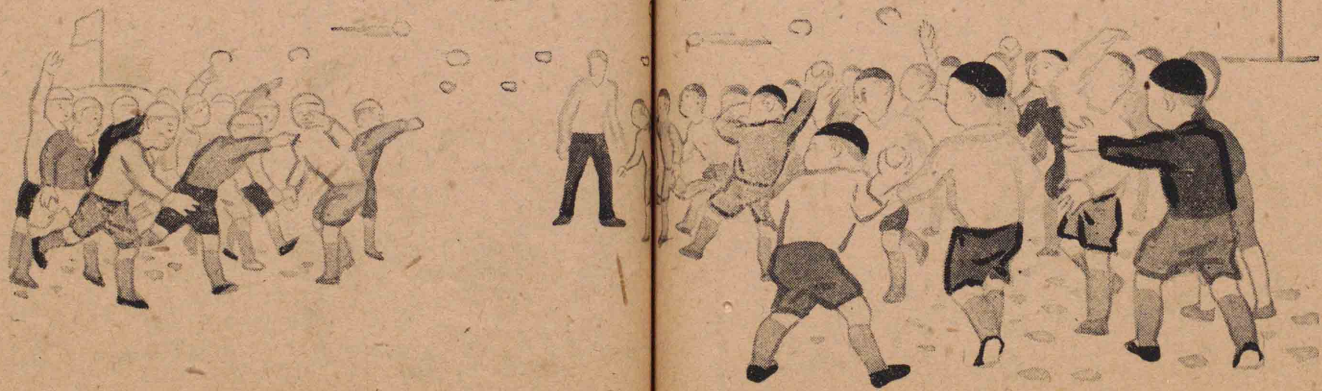
へ飛んで行ったが、友田くんが、

ひよいとしやがんだので、それ

しまった。友田くんも、ぼくをね

らふ。今度こそうまくあててやらうと、カいっばい投げ

てやった。そこへ、どこからかたまが飛んで来て、ぼく

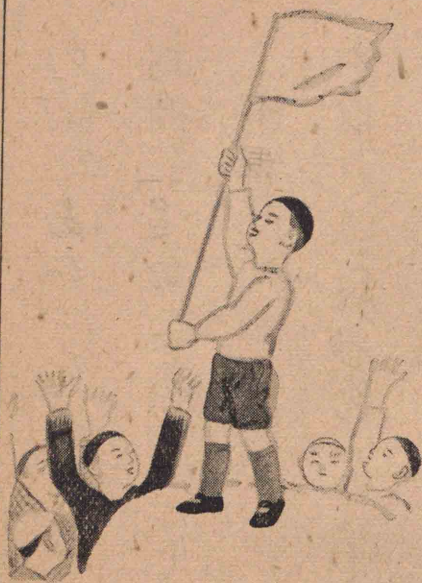


の胸にあたった。「ようし」といひながら、たまをつかんだ時、「進め」の號令が掛った。

兩軍は、「わあ」といつて、かけて進んだ。敵の城の旗を取れば、勝つのだ。しかし、城を守つてゐる隊もあるから、すぐには取れない。白い旗は、つい、目の前にひらひらしてゐるが、手がとどかない。守る隊も、必死だ。ぼくが、山をのぼりかけると、兩足をしっかりとつかまへて、引っぱる者がある。見ると、小野くんた。ぼくがころぶと、二三人が、ばたばたと倒れかかつて來た。やつと起きあがる。また、白い旗がひらひらしてゐる。みかたはと思つて、ちよつとふり返ると、赤い旗も、まだ立つてゐる。

「今のうちだ。」

と元氣を出して、みかた三人が、しっかりと腕を組んで進んだ。三人のうち、だれか一人が、雪の山にのぼつて、旗を取るのだ。ぼくは、まっ先にのぼりかけた。むちゅうになつて



よぢのぼった。とうとう、旗に手がとどいた。ぼくは、山の上に立ちあがって、その旗をふった。

「萬歳」

と、みんなが、喜びの声をあげた。

笛が鳴ったので、兩軍は、もとの位置に並んだ。先生はいはれた。

「今日は赤の勝ち。しかし、どちらもよく戦った。この次に雪が降ったら、またやることにする。わかれ。」
どやどやと、みんなが、ぼくのところへ寄って来た。

「うまくやったなあ。」

と、いって、ぼくの肩をたたく者がある。友田くんだ。

「今度は、ぼくが取ってみせるぞ。」

と、小野くんが、いふ。

いつのまにか、空がくもって、雪がさかんに降りだして来た。

小野くんと、友田くんと、ぼくと、三人仲よく教室へ帰って行った。

十七 菅原道真すがはらのみちざね

天神様にまつられてゐる菅原道真といふかたは、生まれつき賢い人でありました。その上、小さい時から、よく勉強しましたので、のちには、すぐれた、りっぱな人になりました。學問では、道真の上へ出る人はないと思はれてゐました。

ある時、都良香みやこのよしといふ人の家で、弓の會がありました。若い人たちが、大勢その家に集つて、かはるがはる、的をめぐけて弓を引いてゐるところへ、道真もやつて來ました。すると、人々は、

「あの人は學問はできるが、弓はどうだらう。」
「さあ、どうだらうな。」

「だめ、だめ。机の上の勉強ばかりで、腕は線香より細いんだ。」

などと、小さな聲で、ささやき合ひました。平生から、學問では、とてもかなはない道真を、今日はいひとつ、弓でいぢめてやらうと思つたのでせう、一人

の若い男が、つかつかと進み出て、

「どうです。あなたも、弓を

おやりになりませんか。」

といひながら、弓と矢を、道

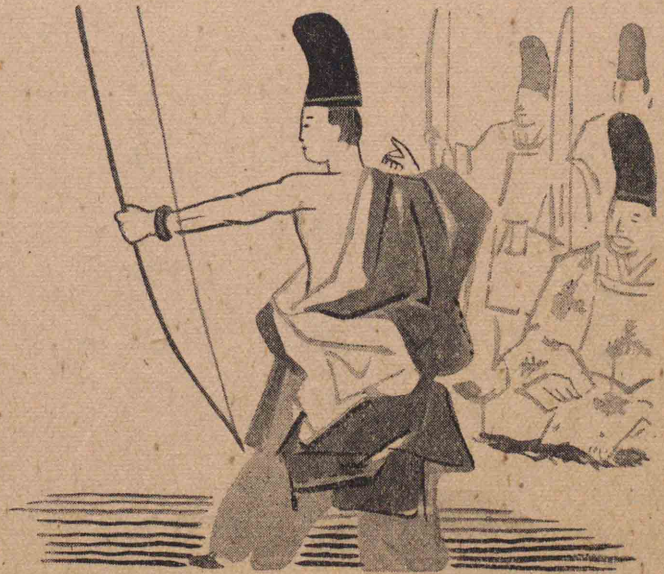
真につきつけました。

おそらく、しりごみするだ

らうと思はれた道真は、その

弓矢を静かに受け取り、前へ

進んで、きつと身がまへました。すると、今まで、やさし



さうに見えた道真が、急にがっしりと二玉様か何かのやうに、強さうに見えだしました。

あたりはしんとして、せき一つするものもありません。

ん。

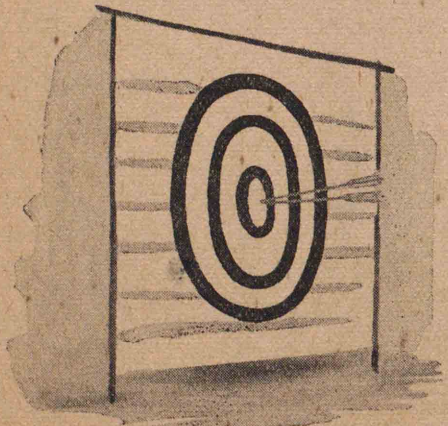
「ひゅう」と、音高くつるからはな

れた矢は、「ぼん」と、的のまん中の

星を、射抜いて立ちました。

道真は、つづいて、第二の矢を引

きしぼりました。



これも、みごとに、ちやうど第一の矢とすれすれに並んで、まん中を射抜きました。

第三、第四、第五と、道真は、目にもとまらぬ手早さで、矢をつがへ、矢を放ちました。的をはづれる矢は、一本もありませんでした。

みんなは、ただ、よったやうになつて、大きなため息をつくばかりでありました。

十八 梅



「あ、梅だ。」

梅が咲いてゐる。」と、

勇さんがいひました。

「まあ、うれしい。」

春が来たのね。」と、
花子さんがいひました。

「まだ、寒いのに
感心な花だこと。」と、
ゆり子さんがいひました。

「花もきれいだけれど、
にほひがいのね。」と、

春枝さんがいひました。

「梅は、花よりも
にほひが咲くのです。」と、
正男さんがいひました。

みんなは、
正男さんのいったことが、
おもしろいと思ひました。

十九 小さな温床

「春子、チューリップが咲いたよ。来てごらん。」
ど、にいさんが、外から窓ごしにいったので、私は、急いで庭へ出ました。

いつか、にいさんが作った小さな温床に、今日も、おだやかな冬の日が、いっばいにさしこんでゐます。見ると、まん中の鉢に、美しいチューリップの花が一つ、にっこり笑ったやうに咲いてゐます。

「まあ、きれいなね。」

ど、私は思はずいひました。ふつくらとした花びらがだきあつて、まだ十分咲ききらない花は、ちやうど、おひな様のぼんぼりのやうなかつかうです。下の方は白で、花の口もどのところに、こい紅べにをさしてゐます。ほんたうに、手に取って、さはってみたいやうな氣がします。

すみれも、一週間ばかり前から咲きだしました。それこそ、ほんたうのすみれ色をした花が、暖い日を受けて、びろろどのやうに、つやつやしてゐます。すみれせん

の花が四つ、かはいらしいさくらさうや、ひなぎくも、
咲いてゐます。きうりの芽生えも、
目だって大きくなりました。

たった一メートル四方ぐらゐの
廣さですが、ここばかりは、寒い冬
も知らないやうに、みどりの葉が
生き生きして、赤や、白や、むらさ
きの花が、美しく咲いてゐます。

「わたしのお人形さんを、ここへ入れてやりたいなあ。」
と、ひとりごとのやうに、私はいひました。

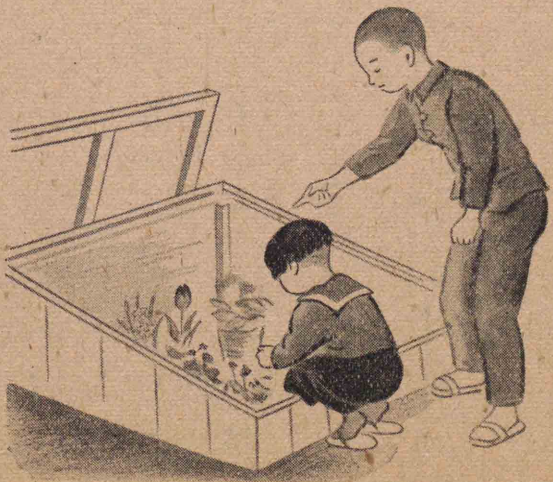
「どうして。」

「中は暖い春ですもの。」
にいさんは笑って、

「お人形さんが、汗をかくだらう。このガラスのふた
をすると、少しすかしておいても、日中は、二十四五
度ぐらゐになるから、春といふよりは夏だよ。」

「でも、夜は寒いでせうね。」

「地の下には、枯れた葉などが入れてあるから、夜もぼ



かぼか暖いよ。」
と、にいさんはいひました。

二十 雪舟

雪舟が、子どもの時の話です。

お寺の小僧になつてまもないころ、ある日、和尚わしやうさん
にたいそうしかられました。

「おまへは、また繪をかいてゐるのか。いくらいっても、
繪ばかりかいて、ちつともお經をおぼえない。おまへ
は、口でいって聞かせるだけでは、だめだ。」

かういひながら、和尚さんは、雪舟を引っぱつて、本堂へ
行きました。

ぶるぶる、ふるへてゐた雪舟は、大きな柱にくくりつ
けられました。

初めは、ただ恐しきでいっぱいでしたが、さびしい本
堂の柱にくくりつけられて、じつとしてゐる間に、雪舟
は、いろいろと考へつづけました。

「いつも、お經を讀まうと思ふのだけれど、机に向かふ

と、つい、繪がかきたくてたまらなくなる。あすからは、きつと、一生けんめいにお經を習はう。わたしが、ここで、こんなにしかられてゐようなどは、おとうさんも、おかあさんも、ゆめにもお知りにならないだらう。」

こんなことを考へてゐると、雪舟は、何だか悲しくなつて、とうとう、しくしく泣きだしました。

涙が、とめどなくこぼれました。ぽたり、ぽたりと落ちて、本堂の板の間をぬらしました。

少し泣きつかれて、ぼんやり、足もとを見てゐた雪舟は、何氣なく、足の親指で、板の間に落ちた涙をいちつてみました。

すると、今まで悲しさうだった雪舟の顔は、急に明るくなつて來ました。雪舟は、足の親指を使ひながら、涙で、板の間に繪をかき始めたのでした。

自分の部屋へ歸つてゐた和尚さんは、しばらくすると、雪舟がかはいさうになりました。もう許してやらうと思つて、また本堂へ行きました。

夕方に近い本堂は、少し暗くなってゐました。和尚さんは、どんなに、さびしかつたらうと思つて、急いで行つて見ると、びつくりしました。大きなねずみが一匹、雪舟の足もとにゐて、今にもとびつきさうなやうです。かまれては、かはいさうだと思つて、和尚さんは、「しつ、しつ。」と追ひましたが、ふしぎに、ねずみは、じつとして動きません。近づいて見ると、それは、生きたねずみではありませんでした。雪舟が、板の間に、涙でかいたねずみでした。

和尚さんはおどろきました。急いでなはを解いてやりながら、

「わたしがわるかつた。おまへは、繪かきになるがよい。これほど、おまへが上手だとは、今まで知らなかつた。」

といひました。雪舟は、にっこりしました。そののち、雪舟は、一心に繪を習ひました。學問もしました。

雪舟は、とうとう、日本一の繪かきになりました。

二十一 三勇士

「ダーン、ダーン。」

ものすごい大砲の音とともに、あたりの土が、高くはねあがります。機関銃の弾が、雨あられのやうに飛んで來ます。

昭和七年二月二十二日の午前五時、廟巷へうかうの敵前、わづか五十メートルといふ地點です。

今、わが工兵は、三人つつ組になって、長い破壊筒はくわいとうをかかへながら、敵の陣地を、にらんでゐます。

見れば、敵の陣地には、ぎっしりと、鐵條網が張りめぐらされてゐます。この鐵條網に破壊筒を投げこんで、わが歩兵のために、突撃の道を作らうといふのです。しかもその突撃まで、時間は、あと三十分といふせっぱつまった場合でありました。

工兵は、今か今かと、命令のくだるのを待つてゐます。しかし、この時とばかり撃ち出す敵の弾には、ほとんど、顔を向けることができませぬ。すると、わが歩兵も、さ

かんに機關銃を撃ち出しました。さうして、敵前一面に、もうもうと、煙幕を張りました。

「前進」

の命令がくだりました。待ちに待った第一班の工兵は、勇んで鐵條網へ突進しました。

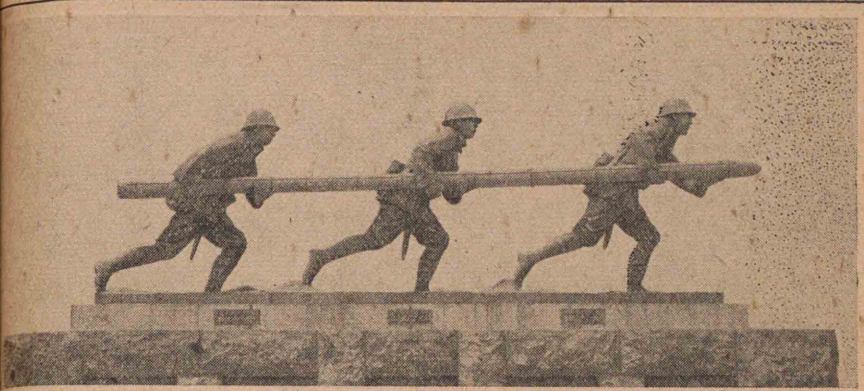
十メートル進みました。二十メートル進みました。あと十四五メートルで鐵條網といふ時、頼みにする煙幕が、だんだんうすくなって來ました。

一人倒れ、二人倒れ、三人、四人、五人と、次々に倒れて行きます。第一班は、残念にも、とうとう成功しないで終りました。

第二班に、命令がくだりました。

敵の弾は、ますますはげしく、突撃の時間は、いよいよせまつて來ました。今となつては、破壊筒を持って行って、鐵條網にさし入れてから、火をつけるといったやり方では、とてもまにあひません。そこで班長は、まづ破壊筒の火なほに、火をつけることを命じました。

作江伊之助、江下武二、北川丞、三人の工兵は、火をつ



けた破壊筒をしつかりとかかへ、鐵條網めがけて突進しました。

北川が先頭に立ち、江下、作江が、これにつづいて走ってゐます。

すると、どうしたはずみか、北川が、はたと倒れました。つづく二人も、それにつれてよろめきました。二人は、ぐっとふみこたへました。もちろん、三人のうち、だれ一人、破壊筒をはなし

たものはありません。ただその間にも、無心の火は、火なはを傳はって、ずんずんもえて行きました。

北川は、決死の勇氣をふるって、すつくと立ちあがりました。江下、作江は、北川をはげますやうに、破壊筒に力を入れて、進めとばかり、あとから押して行きました。

三人の心は、持った一本の破壊筒を通じて、一つになつてゐました。しかも、數秒ののちには、その破壊筒が、恐しい勢で爆發するのです。

もう、死も生もありませんでした。三人は、一つの爆弾となって、まっしぐらに突進しました。

めざす鐵條網に、破壊筒を投げこみました。爆音は、天をゆすり地をゆすって、ものすごくとどろき渡りしました。

すかさず、わが歩兵の一隊は、突撃に移りました。

班長も、部下を指圖しながら進みました。そこに、作江が倒れてみました。

「作江、よくやったな。いひ残すことはないか。」

作江は答へました。

「何もありません。成功しましたか。」

班長は、撃ち破られた鐵條網の方へ、作江を向かせながら、

「そら、大隊は、おまへたちの破ったところから、突撃して行ってゐるぞ。」

とさけびました。

「天皇陛下萬歳。」

作江はかういって、静かに目をつぶりました。

二十二 春の雨

もえて明かるい若草に、
しとしと、細い雨が降る。
雨はこぬかか、糸のやう。

ここは川ばた、やなぎの芽、
ぬれて、しづくが落ちるたび、
ひろがる波のわがまるい。

春は春でも、まだはじめ、
村から町へゆるやかに、
少しにごって行く水よ。

卵のからを浮かべたり、
わらの切れはし浮かべたり、
えびやめだかも、泳がせて。



二十三 大れふ

ぼくらは、はしけに乗って、ぐんぐん沖へ出ました。
 おだやかな海です。文治と、へさきにすわって、船が
 あがると、からだを浮かすやうに、船がさがると、から
 だを沈めるやうにしてみました。

「にいさん、はま屋の船だよ。」

文治が指さしたので、見ると、船が一さう走ってゐます。
 屋號を染めぬいた小旗も見えます。子どもが、船のま
 ん中にゐます。

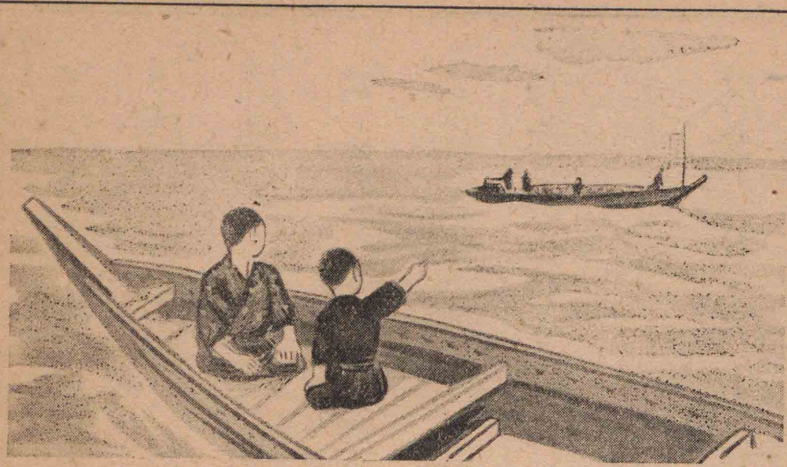
「あれは、きつとはま屋の正治くん
 だよ。正治くん、正治くん。」

と大聲に呼びながら、文治が立ちあ
 がりかけると、ともにゐた船方が、

「あぶない。」

といひました。

あとをふり返ると、もう矢島の岬みさき
 も見えません。目のとどくかぎりは



まっさをな水です。

やがて網場へ来ました。何十さうといふ船が、今、思ひ思ひに網を張ってゐるところです。白波を立てながら、行ったり来たりして、まるで戦場のやうです。ぼくらの網船は、もう網をたぐり始めました。

「さあ、のう。」

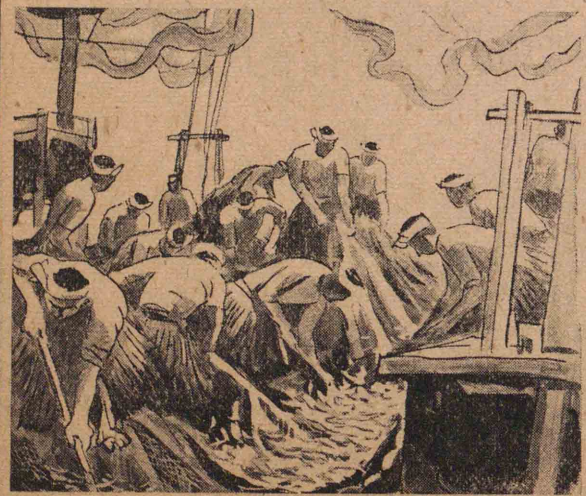
と、一人がおんどを取ると、大勢の船方が、みんなこれに合はせて、

「やっさ、やっさ。」

と網をたぐります。だれもかれも、日に焼けたからだから、玉の汗を流してゐます。

網が、せばまって来た時、網船は、ぼくらの乗つてゐる船を呼びました。

網船二さうの間へ、まっすぐに乗り入れました。大きなたもて、網から、いわしをどんどんぼくらの船へあげます。見るまに、船の中には、いわしの山が築かれます。



いわしの重みで、船がぐつと傾くほどです。

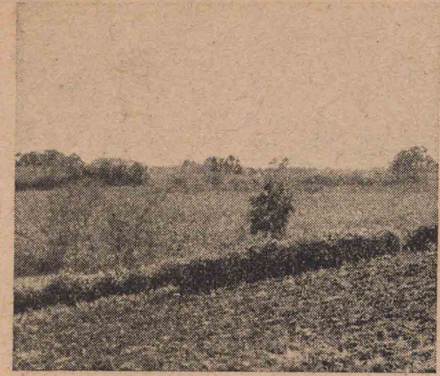
ぼくらの船は、左右の網船から、竿で押されながら、しだいに網の外へ出ます。出ると、機械をいっぱいに掛けて、もとの海岸へ急ぎました。

いつのまに立てたのか、へさきには、大れふを知らせるまっかな吹流しが二本、威勢よく風にひるがへっていました。

二十四 東京

今日、東京といふ映畫を見せてもらひました。

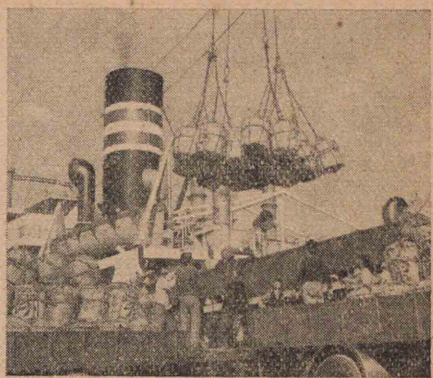
初めに、廣い野原がうつりました。ところどころに林があつて、どこかで、小鳥の鳴く聲がしてゐました。



「ここは、むさし野です。東京の近くには、かうした静かな野原が、ひろがつてゐます。」

といふ説明の聲がしました。

むさし野が、うすくなつて消えると、船の汽笛が「ボ



「とひびきました。さうして、大きな貨物船が、目の前にあらはれました。汽船から、たくさんの荷物がおろされます。」

「あれは、臺灣たいわんからのバナナです。」

水の流が見えて、隅田川すみだのけしきになりました。川をさかのぼって行くど、りっぱな橋が、次から次へとかかつてみました。橋の下をくぐって通る時、

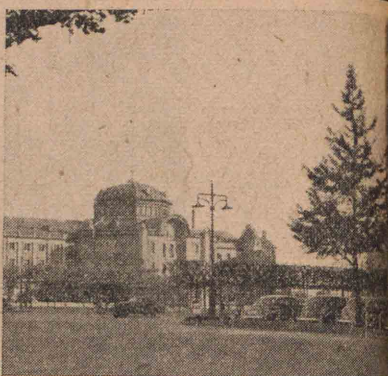
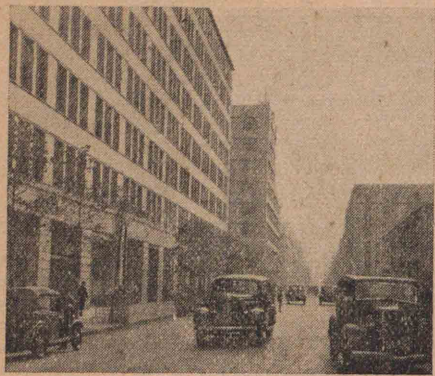
「ゴー」といふ電車のひびきがして、寫真がかはりました。

たくさんのレールが光って、何臺もつづいた大きな電車が来る、汽車が来る。

「東京、東京。」

と呼ぶ聲がして来ました。

東京驛の前にある大きな建物が、じゆんじゆんにあらはれ、馬場先門の廣場

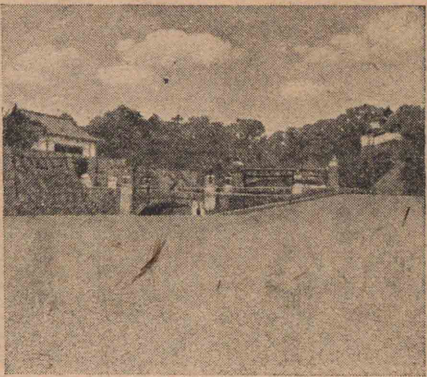


があらはれました。

正面に、松の木が茂ってゐて、白いやぐらが見えま
した。私は、すぐ宮城だといふことがわ
かりました。

二重橋がうつりました。

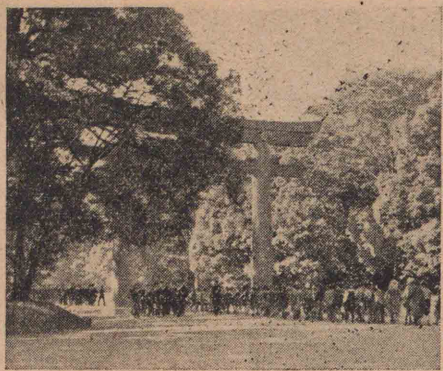
目の前にをがむ二重橋、
けだかい、美しい二重橋。



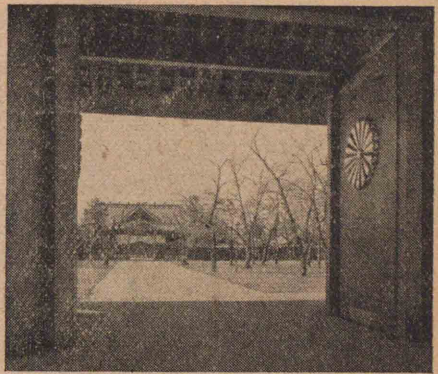
二年生の時に習った詩が、思ひ出されました。「君が代」
の音楽が始りました。私たちは、きちんとすわりなほ
して、おじぎをしました。

ときは木の茂った清らかな道がうつりました。

「ここは、明治神宮の参道です。」
お参りの方が、たくさん通ります。そ
の中に、子どももまじってゐました。あ
の子どもたちのやうに、お参りしたいも
のだと思ひました。



さくらの花が、いっぱい咲いてゐるところがあら
はれました。風が吹いてゐるらしく、さくらの枝がゆ



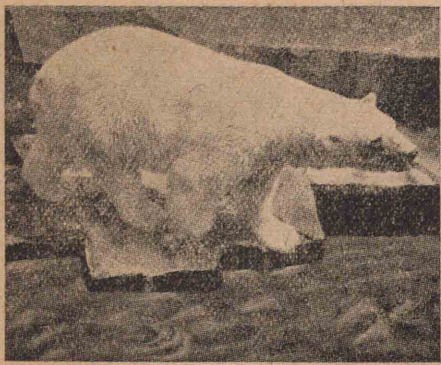
れてみます。花と花との間から、大きな鳥居が見えました。それから、ま正面に、靖國神社やすくにがうつりました。「海ゆかば」の音楽が、おごそかにひびき始めました。菊の御紋のついたまん幕が、風にゆれてみました。

たくさんひびの菊の鉢が並んでみます。目のさめるやうな菊の花です。日比谷公園の菊のてんらん會でした。

ふんすゐが、勢よくあがってあります。その後、りっぱな建物があらはれました。

「これは、上野の帝室博物館です。」

大きな木が立ってゐて、その根もとに、金網の張つてある池が出ました。水鳥が、たくさん泳いでみました。猿さるが、上手にぶらんこしろくまをしてみました。白熊が、頭をふつてみました。きりんが、せ



いのびをしたやうなかつかうをして
ました。ライオンが、大きな聲を出しま
した。

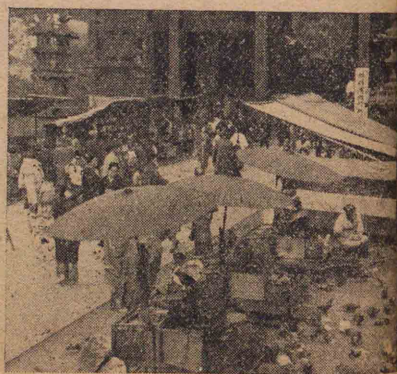
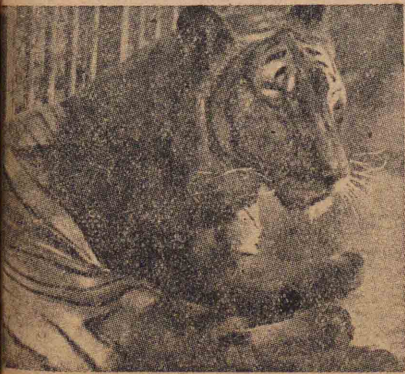
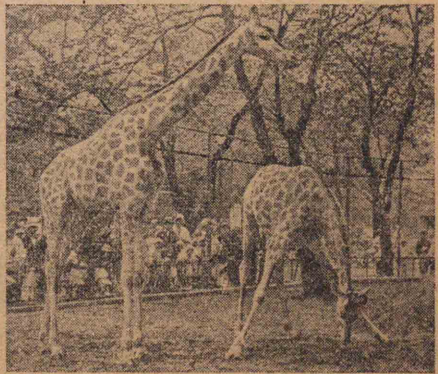
「ここは、みなさんに喜ばれる上野の
動物園です。」

象が、のそりのそりと歩いてゐます。
虎が、じつとこちらを向いてすわつてゐ
ます。

鳩が、何十羽となく集つて来て、ゑさを
拾つてゐるところが、出ました。小さ
な女の子が、豆をまいてやりました。

「ゴーン」と、かねがひびいて、浅草の
大きなお寺があらはれました。

にぎやかな銀座通が、うつりました。
両側には店が並んでゐて、人が、すれあ
ふほどたくさん歩いてゐます。電車や、
自動車が、ひっきりなしに通ります。
やなぎの並木が、にぎやかな通をきれ



いにかぎつてみました。

にはかに、笛とたいこの音がひびいて来て、ずらりと並んだお祭のちやうちんが、うつりました。「わっしよい、わっしよい。」といふ元氣な子どもたちの聲がして、みこしをかついだ子どもたちもみあひもみあひ出て来ました。

そのにぎやかな元氣な聲が、急にかはって、「ザー」といふ機械の動く音に

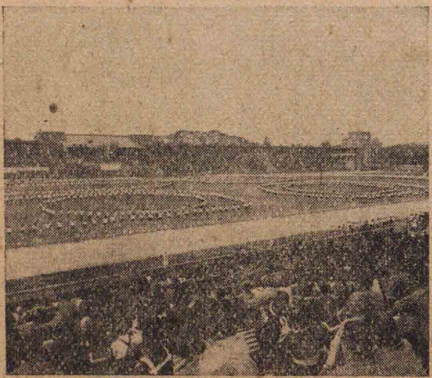
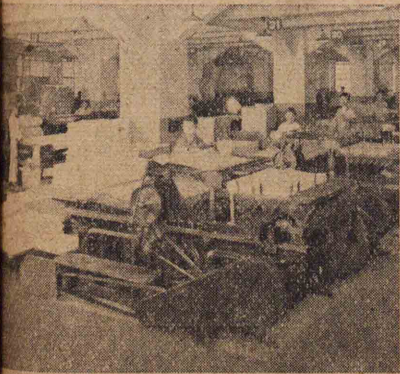
なりました。印刷の工場です。山のやうに積まれた紙

が、機械の間を流れるうちに、字がすられ、繪がすられ、たちまち本になって出て來ます。

次から次へ、大勢の生徒さんたちが、足並みをそろへて行進して來ます。それが美しいわになったかと思ふと、體操をしたり、いうぎをしたりします。

「これは、明治神宮の競技場です。」

空には、白い雲がぽっかり浮かんで、日の丸の旗がひる



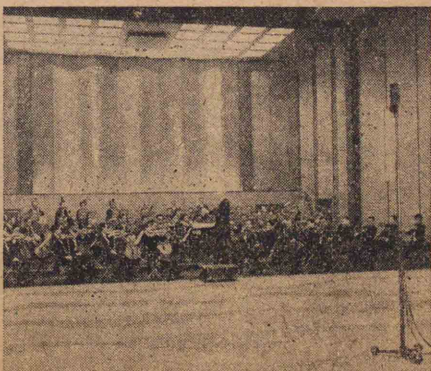
がへつてゐます。

勇ましい音楽が始りました。大勢の人が、並んで演奏してゐます。

「今、音楽を放送してゐるところです。」

放送局のアンテナが、空高くうつりました。よく晴れた空を、鳥がむらがつて飛んでゐましたが、今度は、遠い空から飛行機がやって来て、やがて着陸しました。

「ここは、空のげんくわん東京飛行場です。」

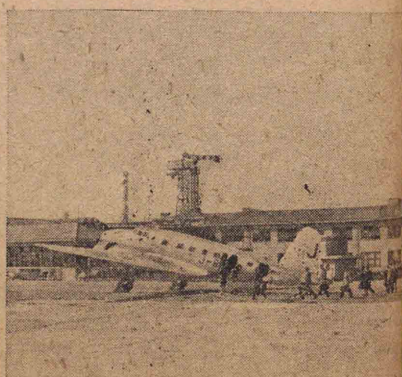


今、飛び出さうとする飛行機に、乗客が乗ってしまふと、いきなり爆音がして、みるみる、鳥のやうに小さくなります。

ここで、いちばん初めに出たむさし野がまたうつりました。ずっと野原の向かふに、富士山が光って見えます。

「夕やけ小やけ、

あした天気になあれ。」



局	貨	張	王	郷	燒	傳	畫	器	除	豐	般
(142)	(132)	(117)	(101)	(86)	(71)	(59)	(48)	(33)	(26)	(18)	(8)
驛	突	射	味	猫	改	幕	雷	增	惠	刈	
(133)	(117)	(101)	(86)	(72)	(60)	(48)	(33)	(27)	(19)	(8)	
建	班	放	築	捨	望	階	常	種	似	敷	
(133)	(118)	(102)	(90)	(75)	(61)	(48)	(35)	(28)	(20)	(9)	
詩	成	温	投	授	古	臺	會	類	積	置	
(134)	(119)	(106)	(92)	(76)	(61)	(49)	(35)	(28)	(22)	(11)	
清	無	鉢	擊	尊	卷	萬	寫	旅	歸	飼	
(135)	(121)	(106)	(92)	(76)	(63)	(49)	(36)	(28)	(22)	(11)	
社	秒	僧	必	袋	延	賢	眞	働	后	束	
(136)	(121)	(110)	(94)	(79)	(64)	(50)	(36)	(29)	(23)	(13)	
紋	爆	經	倒	飯	柱	穴	攻	港	忠	招	
(136)	(121)	(110)	(94)	(79)	(65)	(53)	(37)	(30)	(24)	(14)	
公	移	堂	腕	品	警	不	説	由	義	氏	
(136)	(122)	(111)	(95)	(80)	(68)	(53)	(38)	(31)	(24)	(14)	
博	染	解	肩	圖	防	歳	汁	機	陽	去	
(137)	(126)	(115)	(97)	(83)	(68)	(53)	(41)	(31)	(25)	(14)	
館	傾	點	勉	堅	角	役	園	械	散	參	
(137)	(130)	(116)	(98)	(85)	(69)	(57)	(43)	(31)	(26)	(14)	
技	威	條	的	演	團	仕	材	員	害	繪	
(141)	(130)	(117)	(98)	(85)	(69)	(57)	(45)	(32)	(26)	(15)	
奏	京	網	身	習	粉	事	映	關	藥	姉	
(142)	(130)	(117)	(100)	(85)	(70)	(57)	(48)	(33)	(26)	(16)	

こんな子どもの歌が、聞えて來ました。
 そのうちに、空も消え、野原も消え、みんな消えてしまひました。

昭和十七年七月八日印刷
昭和十七年七月十日發行
昭和十七年七月廿五日翻刻發行

本卷挿入ノ寫眞ハ昭和十七年六月陸軍省海軍省ト協議濟

著作權所有

著作兼發行

文部省

初等科國語二

定價金貳拾壹錢

カ

昭和十七年七月十一日
文部省檢査濟



翻刻發行
兼印刷者

代表者 井上源之丞

印刷所

東京都王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社工場

發行所

東京書籍株式會社

